

Title	御伽草子の漢語についての一考察
Author(s)	大石, 亨
Citation	語文. 1984, 44, p. 27-36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68724">https://hdl.handle.net/11094/68724</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 御伽草子の漢語についての一考察

大石 亨

## 一、はじめに

中世の語彙の特色の一つとして、漢語の増加、日常生活への進出ということがあげられる。御伽草子の各作品の語彙に占める漢語の割合は一割前後であり、<sup>(注1)</sup>同時期の他のジャンルの作品に比べて極めて低いのであるが、御伽草子全体についてみると非常に多様な漢語が使われており、当時ある程度一般化していた漢語が多いと思われる。従って、御伽草子は当時の漢語使用の実態を知る上で絶好の資料になると考えられるが、従来、御伽草子のことばに関する研究は極めて少なかった。しかし、正確なテキストが多く紹介され、複製、翻刻の作業が急速に進んでいる現在、個々の作品に関する、語学的観点からの考察が必要であると考えた。

そこで、今回は御伽草子の中でも屈指の作といわれ、広く読まれたと思われる次の三作品を資料として、その中に用いられている漢語について考察を試みようと思う。尚、使用したテキストはなるべく書写の年代が古く、文章も整っているものを選んだが、誤写があるかと思われる箇所は、他の諸本を参照した。

(1)『福富物語』(仮題) 赤木文庫蔵絵巻

(2)『さるげんじ』赤木文庫蔵丹緑本

(3)『三人法師』赤木文庫蔵丹緑本

(いずれも、横山重氏・松本隆信氏編『室町時代物語大成』(昭和48年、角川書店)所収のものによる。)

漢語の認定に当たっては、次の点を考慮した。

イ、漢語サ変動詞は、漢語十「す」に分ける。

ロ、三字以上の漢語は原則として二語に分つ。但し、慣用的に一語として用いたと考える場合には分けない。(例、一大事、貴賤群集、など)

ハ、接頭辞のついているものは、原則としてそれのない場合と同じに扱う。但し、接頭辞なしでは用いられないものは、接頭辞をつけて扱う。(例、御所、御分、など)

ニ、意味の不明なものは認めない。(例、けてう||敵重? など)ホ、人名・地名・社名・書名等の固有名詞や、年号・月日・日時・数詞は除く。

## 二、量的考察

御伽草子の漢語の性格を考察するに当たり、先に述べた配慮の下

に抜き出した漢語及び混種語は、次表の如くである。

表1

作品名	三人法師	さるげんじ	福富物語
一字漢語	142 (25.0)	54 (20.6)	39 (41.9)
二字漢語	373 (65.7)	192 (73.2)	39 (41.9)
三字漢語	30 (5.3)	11 (4.2)	8 (8.6)
四字以上	23 (4.0)	5 (1.9)	7 (7.5)
計	568	262	93
混種語	31	26	4

延べ語数

表2

作品名	三人法師	さるげんじ	福富物語
一字漢語	39 (13.4)	19 (13.2)	17 (28.8)
二字漢語	215 (74.2)	114 (79.2)	32 (54.2)
三字漢語	18 (6.2)	6 (4.2)	3 (5.1)
四字以上	18 (6.2)	5 (3.5)	7 (11.9)
計	290	144	59
混種語	13	11	4

異なり語数

カッコ内の数字は総漢語数に占める割合(%)

この表からわかるように、二字漢語が最も多く、ついで一字漢語、三字漢語、四字以上からなる漢語の順となる。四字以上の漢語で目立つのは、「比翼連理」「紅花緑葉」など、中世における類型的な慣用句の中に見られるものと、「有為無常」「坐禪入定」など、仏教関係の語である。

また、一ページあたりの漢語数は、『福富物語』十二・八語、『さるげんじ』十五・六語、『三人法師』二十五・九語となり、『三人法師』の漢語の比率が他の二作品と比べてやや高いことがわかる。さらに、二字漢語の中で仏教語の占める割合を見ると、『福富物語』

十五・六多(五語)、『さるげんじ』九・六多(十一語)、『三人法師』二十四・四多(五十三語)となる。(カッコ内は仏教語の異なり語数)このように、それぞれの作品の内容によって漢語の量や性格が異なるのであるが、ここではあえてそれらを区別せず、御伽草子という大きな枠の中の漢語として考えることにする。そこで、三作品全体について見ると、二字漢語は、延べ語数六百四語、異なり語数三百二十七語となる。以下、この三百二十七語について、その性格を分析してみようと思う。

三、比較的考察

はじめに、御伽草子に使用されている漢語が、それ以前の時代のどのような資料にいつ頃から用いられているか、また、中世以後に新たに見られるようになった漢語はどのような性格のものかということについて述べることにする。用例の調査は、『日本国語大辞典』(小学館)、宮島達夫氏『古典対照語い表』(昭和46年、笠間書院)及びその他の文学作品の索引等によった。語彙のことであるので、さらに精細な調査によって他に用例を見出し得るかもしれないが、大勢はうかがい得るかと思うのである。この調査により、先の三百二十七語を次のように分類した。

A、中古の仮名文と一致するもの。

- 悪業 案内 衣裳 以前 一定 一同 一念 因果 回向
- 学問 果報 京中 兄弟 孝養 供養 気色 懈怠 結縁
- 家礼 下臈 見物 更衣 高家 後代 強盗 御所 御前
- 五体 御覧 今上 建立

以上はア行音・カ行音で始まる語だけを掲げたのであるが、全部

で百八語が中古の仮名文に用いられている。これらは、中古において少なくとも貴族の間では一般化し、女性の間でも用いられていたと思われる。また、仏教語や今日においても日常に用いる漢語が多く、御伽草子の時代に基本的な漢語となっていたことが推定される。

B、中古以前の漢文・変体漢文と一致するもの。(但し、Aの漢語を除く。)

異香 一所 違例 慰勉 運命 悦喜 閻浮 恩愛 遠國  
戒行 会合 過去 還御 看経 顔色 関東 看病 管領  
祈請 窮屈 九泉 旧里 器用 形儀 近国 近習 公家  
九献 群集 稽古 結構 業因 故郷 虚空 古人 御辺

以上もア行音・カ行音で始まる語のみであり、他に百十六語、計百五十二語にのぼる。これらが中古においてすでに字音で読まれていたかどうかについては尚検討を要するが、少なくとも字面は存在したのである。また、御伽草子とは異なる意味で用いられているものも少なくない。これについては後述するが、漢語の一般化に伴う語義変化であると思われる。

C、『今昔物語』と一致するもの。(但し、A・Bの漢語を除く。)

一族 奇特 下女 現在 御定 子息 諸人 同名 由来

この八語も、さらに古い用例を見出すことができるかもしれない。しかし、いずれにせよA・B・Cあわせて二百六十九語が中古から用いられているのである。これら古くから用いられた漢語は、中世前期の軍記物・説話・随筆等にひきつがれ、次第に広く深く浸透していったと考えられる。また、その半数近くは現在も用いられるような基本的なものであり、比較的安定した漢語であると言えよう。

次に、中古には見られない漢語について考える。

D、中世前期(鎌倉時代)に新出のもの。

一円 一河 一樹 一巡 威徳 有徳 峨々 寒熱 愚僧  
工夫 公方 契約 降参 詩歌 蛇体 上人 思案 成人  
雑談 大軍 談合 籌策 亭主 貞女 道行 当所 当世  
塔婆 同朋 動乱 内談 男子 女性 拜殿 発句 北国  
幔幕 面々 遺跡

これらは中世前期から用いられ、中世後期には広く見られるようになる。

E、中世後期(室町時代)に新出のもの。

衣桁 一命 鬱氣 会下 渴命 伽羅 近内 苦劳 御酒  
御分 生害 商売 辛劳 調法 茶香 唐犬 本病 遊民  
連衆

これらの比較的新しい漢語も、謡曲・狂言・抄物・キリシタン資料及び『節用集』『下学集』等の古辞書など、同時代の資料に広く見られるものがほとんどであり、この時代に漢語が急速に増加し、浸透していったことを物語っている。それでは、これら中世以降に新たに見られるようになった漢語は、どのような社会的背景の下に生じ、一般化していったのであろうか。

まず第一に気付くことは、武家社会の勃興という時代の新気運を反映して、「大軍」「動乱」「生害」「一命」「降参」「御分」「幔幕」など、武士や戦乱に関係のある語が多いということである。これらは、軍記物語に先ず用いられ、武士の進出に伴って次第に一般化していったと思われる。

また、直接戦乱には関係がないが、戦乱による不安・世相の混沌がもたらした、主従、あるいは家と個人との関係の強化といった封

建的な社会制度と深く関る語として、「一族」「契約」「談合」「内談」などの語があげられよう。これらは、家・領主・座等によって象徴される、個人を束縛する統制的・集団的な風潮を背景として一般化したのではないかと思われる。

一方、戦争の連続と社会の混乱は、人々に生活苦をもたらし、民情は不安になる。このような、人々の困窮ぶりを表わすのが、「本病」「渴命」「苦勞」「辛勞」「鬱氣」等の語であり、中古には、公家の日記や一部の説話文学にしか見られなかった「物念」「強盜」などの語とともに広く見られるようになるのである。これは、中古にはほとんど文学作品に登場しなかった庶民を主人公とする作品がこの時代に多くつくられていることとも関係するのであろう。

さて、このような戦乱・乱離の世相とともに、中世に忘れてはならないものに仏教思想の浸透ということがある。鎌倉時代に起こった新仏教がこの時代に下級武士や庶民の間にまで広く浸透したことは周知の通りであるが、それに伴って仏教語も一般に広まってきたと思われる。御伽草子の中に仏教語がかなり用いられていることは先に述べた通りであり、古くから用いられているものの中には、仏教色が薄らいで日常語となっているものさえ見られる。いかに仏教が人々の生活の中に深く根をおろしていたかを物語るものである。しかし、仏教の隆盛は、同時に墮落の始まりであり、人々は仏教にかわるものとして、物質を熱視しはじめるのであった。

農業・手工業の発達によってもたらされた商業の発展と貨幣の流通は、墮落した仏教にあきたらぬ人々に物欲の精神と金権思想を生み出させるのである。このことを象徴するかのようには、「商売」「有徳」という語が中世に現われ、急速に一般化する。

「有徳」は「有得」とも書かれ、ウトク、ユウトクと読まれるが、中国では、〈徳のある人〉(有徳)、〈得る所がある〉(有徳)という意味で用いられていた。ところが我が国では、『日葡辞書』に「Vtocu (ウトク) Aru sahai (有徳) 例' Vtouni Gozaru (ウトクニゴザル) 富裕である」とあるように、〈富裕な、金持ち〉という意味で、室町時代に頻繁に用いられている。〈徳があるもの即ち〈金持ち〉〉となるところに、この時代の現世利己的な物質主義が表われている。

以上のように、中世以降に新たに見られるようになった漢語は、中世の戦乱・乱離の世相とそれによる人々の苦悩、さらに個人を束縛する統制的・集団的な風潮や金権主義の横行といった、いわば時代の精神とも言うべきものと深く関っているということができよう。第二に気付くことは、中世に新たに見られるようになった漢語の中に、中国に典故を見出せないものが多いということである。諸橋轍次氏『大漢和辞典』(大修館書店)、中村元氏『仏教語大辞典』(昭和50年、東京書籍)等による調査の結果、典故を見出し得ない漢語は、次の三十六語である。

\*一巡\*渴命 還御 京中 近国\*近内 見物 高家\*降参  
御詫\*御分 御辺 参籠\*蛇体\*生書\*商売\*辛勞\*雑談  
他念\*談合\*調法\*唐犬 当座\*当所\*内談 内々\*女性  
物念 返事 傍輩\*本病 門跡 遊君 様体 連歌\*連衆

このうち、中古以前の用例を見出し得ないもの(\*印)は、十八語にのぼる。また、「見物」「返事」「内々」等が中古にすでに字音で読まれていたかどうかは疑問である。このように、和製漢語(実際に、これらの漢語が中国にはなく、確かに我が国で造り出され

たということ立証するのは困難であり、一方では、「公方」「大名」「面々」などのように字面は中国にも存在するが、日本では意味・用法が全く異なり、同一の語とは考えられない場合もあり、事情は単純でない。は、中世に入つてその数を増した<sup>(注3)</sup>のであるが、ここでは、その中から恣意的にいくつかを選び、考察の対照とする。

「雑談」「談合」「内談」などに見られる。談、という語基は、中世以降強烈に活躍するのであるが、同じくへかたる、はなす」という意味の、論、や、語、がへ意見をたたかわせる、議論する」という意味を持つのに対し、この字は、へなごやかにものがたる」という意味を持つものである。従つて、談、を構成要素とする和製漢語が多いということは、日本人のことなかれ主義を象徴しているように思われる。また、これらの漢語は、先に触れた通り、中世の集団的な風潮を背景として生まれたと考えられるが、この風潮は農民や町人の団結をもたらし、生産力の向上とともに、庶民が社会に台頭してくる大きな要因となる。即ち、村民の自治的集団としての村が発達し、村では寄合が開かれて様々のことを相談する。やがて人々は権力に反抗して一揆を起こすようになるが、談、という語基はそのような民衆のエネルギーを象徴するかのよう、室町時代に非常に活躍するのである。

「調法」は、室町時代に新出するともに日記・文書等に広く用いられ、意味も多様化するが、中国に出現が見当たらず、和製漢語である可能性がある。字義か言へば「調」はへととのえる、しらべる、法」はへ道理、みち、やり方」であるから、『日葡辞書』に「Chabo」(チ ヨウハウ) 物事を整備すること、または用意し整えること「Chabo」(チ ヨウハウ) しつらえること、または準備するこ

と」とあるのが本来の意味であると思われる。ところが、『三人法師』では「此二三日は、我らも、あらゆふ、てうほうつきて、けふりをも、たてず。」とあり、へ食事の準備、料理」という意味である。また、『日葡辞書』に「Sacranau chōsuri (肴を調法する) 肴を用意し、整える」とあり、「御湯殿上日記」文明九年八月二十九日の条には「昨日の御てうほう色々まいる」とあるが、これもへ料理」という意味である。一方、中国に出現してもつ「調理」「料理」も、本来はへ整える、処理する」という意味であるが、日本ではいずれも食物に限って用いられているのである。

また、もともとへかけ走る」という意味であった「馳走」という語は、<sup>(注4)</sup>日本でへ世話をする、もてなす」という意味に変化し、さらに中世後期頃から、やはりへ食事、酒肴」という意味で用いられるようになる。

このように、これらの漢語はいずれもよく似た語義変化を起こしているのであるが、それは、これらの漢語が一般化し、日常語となつたために、最も身近で日常的なへ処理・用意」でありへ世話、もてなし」であるへ食事」へと意味が限定されていったと考えられる。つまり、漢語の日常語化に伴う語義変化であると言えようが、その背景として、当時の日本人の物質中心主義が関係しているのではないかと思われる。

次に、和製漢語というよりも、本来の書き方が忘れられたために語義変化を生じ、別の漢字を当てて書き表わされるに至つたと考えられるものについて述べる。

『さるげんじ』に「きんなんひ、きんごくの大みやうは」とある「きんなんひ」は、「幾内」の訛りであろうと思われる。「かたこと」には、

「きんのう(昨日)」「みんなさま(皆様)」「おんなし(同じ)」等、  
音の前に「ん」の入る例がいくつか指摘されているが、「きんなひ」  
も恐らく「幾内」が文字と離れて永く通用された結果、「近郷」「近  
在」などと混同を起こしたものと思われる。同じく御伽草子の『あ  
きみち』には「むかし、鎌倉のきんなひに」とあり、完全に本来の  
語義が忘れられ、「近内」と意識されていたらしいことがわかる。

「三人法師」に「などや、子どもの、かつみやうをも、はからは  
せ給はぬぞ」とある「かつみやう」は、へ飢餓が迫った命」とい  
う意味であり、『運歩色葉集』や『甲陽軍鑑』等に見える「渴命」とい  
う語であろうと思われるが、中国には出典を見出し得ない。これは、  
もともと、仏教語で「生活」という意味の「活命」という語である  
と考えられる。当時、人々の生活が苦しかったために、本来「生活」  
という意味の、カツミヤウ、が「苦しい生活」という意味になり、  
「渴命」と書かれるようになったのであろう。また、この時代に使  
いられる「辛勞」も同様にもとは「心勞」という語であり、これに  
へつらい」という意味が加わった結果の当て字と考えられるが、いず  
れも実証に乏しいうらみがある。さらに詳しい調査が必要であろう  
が、御伽草子の漢語の中には、漢字ばなれによる語義変化を起こし  
たものが多いということは事実である。そこで次に、漢語の語義変  
化という問題について考えてみたい。

#### 四、漢語の語義変化

語義変化においては、その内容・原因・時期等が問題となつてく  
る。また、語義変化は〔I〕指示物をめぐる状況の変化によるもの、  
〔II〕言語自体の意味変化、〔III〕形態との関りによるもの、に分けら

(注5) ここでは、言語自体の意味変化を中心に、その変化をいくつ  
かの型に分類しながら考えることにする。尚、語義変化が起こった  
結果、本来の意味(原義)とずれて生じた意味(転義)とが同時に  
共存する場合と、本来の意味が用いられなくなってしまふ場合があ  
るが、ここでは両者を区別せずに考える。

さて、二字漢語は用法の上から大別して、名詞・動作語・形容語  
の三つに分けることができる。中国語では語尾変化がないので、み  
かけ上は品詞の区別がなく(伝統的には、実詞と虚辞の二類にしか  
分けない)、語順によつて品詞が決定される。それが日本語に取り  
入れられる際には、一般に体言の資格となり、動作語を日本語の動  
詞として用いる場合は、「す」をつけてサ行変格に活用させて用い  
るのが普通であり、また、形容語は、「たり」又は「なり」をつけて  
形容動詞として用いるか、副詞として用いるのが普通である。「装  
束く」のように漢語の語尾を活用させるものや、「鬱陶しい」のよ  
うに形容詞として用いられるものもあるが数は少ない。語義変化を  
起こした漢語の中には、用法の変化を伴うものが少なくない。以下、  
例をあげながらその変化の型を観察することにする。

#### ①名詞→動作語

他界は、文字通り「他の世界」を意味する語であり、仏教で  
は「死者の世界、あの世」を指す。ところが、『三人法師』には「此  
ほどは、しよくじを、たやし給ひ候て。はや、御たかい候て。」とあ  
り、名詞である「他界」が「死去する」という意味の動作語として  
用いられている。

#### ②名詞→形容語

所詮はもともと仏教語で「経文で頌わされるもの、即ち義理」

という意味であるが、『さるげんじ』には「しよせん、大みやうのまねをせよかし」とあり、へつまるところ、こうなつたからには」というぐらゐの意味で副詞として用いられている。

また、**器用**は本来へ役に立つ器物、有用な人材」という意味の名詞であるが、『福富物語』に「すぐれてきようにものし給は」とあるように、へ技能がすぐれたさまを表わす形容動詞として用いられている。

#### ③ 動作語→名詞

**管領**、**更衣**、**隨身**、**奉行**は、それぞれへすべ取りしまるへ着物を着かえるへ身に所有するへ命を受けて事を行う」という意味の動作語であるが、我が国では、いずれもその動作をする人させる人を指す名詞としても用いられる。

#### ④ 動作語→形容語

**結構**という語は、建築などの構成についていう動作語であるが、その結構がみごとであるという意味で、**結構な**という形容語としての用法が生じたと考えられる。

また、**一定**という語は、へ一つに定まる」という意味の動作語であるが、『さるげんじ』に、「しやうらくは、いちやうにて候まゝ」「いちやう、さかづきを、さしそんすべし」とあるように、へ確実だ」という意味の形容動詞や、へきつと、必ず」という意味の副詞として用いられている。

#### ⑤ 形容語→名詞

**七条**は、七幅を寄せて縫い合わせた袷袢の一種で、もともと**七条の袷袢**と呼ばれていたが、それを略して、**七条**だけで名詞として用いることが起こつた。他に、**雑色**、**中間**、**同名**、

など、本来修飾語であつたものが、それだけで修飾される物や人を表わすようになる例は非常に多い。

#### ⑥ 形容語→動作語

**狼藉**は、もともとへとり乱したさまを表わす形容語であるが、『福富物語』に「下手の、おならこきめか、かゝるらうせき、うてや」とあるように、へ乱暴をはたらくこと」という動作語としての意味を持つてきている。

以上、用法の変化を伴う語義変化について述べたが、これらは、変体漢文・記録体等において漢語を主体的に実状に合致するように用いたことが一つの原因であつたと考えられる。

次に、用法の変化しない語義変化について述べるが、これは、言わば和語的な変化であり、日常語化・和語化した漢語に起こることが多いと考えられる。

(A)として、原義と転義との間に共通する部分が認められるものをあげる。これには、①連鎖状の変化と、②放射状の変化とが考えられる。

①の連鎖状の変化とは、語義が次第にずれていって類義的な語義に移るものである。たとえば、**不断**がへ絶え間ないさまからへつねづね、日常」という意味に変わったり、**不便**という語がへ都合の悪いこと、また、そのさまからへかわいそうなこと、気の毒なこと」という意味に転じたりするような場合である。前者は状態語から状態語への変化であり、後者は状態語から心情語への変化である。状態語から心情語への変化とは、状態を表わす語に人間の心情が加わり、次第に心情の方へ意味の重点が移つてゆくことであり、**笑止**という語がへ困つたことからへ気の毒だ」という意

味に変化するのもこれである。これらはいずれも形容語であるが、動作語にも同様な例が多い。たとえば、『支度』が「計算する」から「準備する」意味に変化したり、『追従』が「へつき従う」から「おもねる、こびへつらう」意味に変わったりする場合であるが、これらは内容的につながっているのである。このように、明確に区切ることができない状態や心情を表わす形容語や動作語にこの型の変化が多いことは言うまでもないが、『不断』に「普段」、『不便』に「不愆」又は「不愆」という字が当てられることからわかるように、漢語の日常語化に伴って原義が忘れられた結果、このような変化が起こったものと考えられる。

②の放射状の変化とは、意味の拡大又は縮小のことである。

拡大は、『女房』が中古には「宮中の女官」を意味していたが、中世には一般に「婦人、女性」を指すようになるように、ある漢語が一般化する過程にみられることが多い。また、その際に、その漢語が陳腐化してしまつて、意味が下落してしまうことがある。

一方、縮小は、『執筆』、『宗匠』、『一巡』がいずれも連歌関係に意味が限定されてしまうように、ある一定の社会にのみ用いられて語義が特殊化してしまつ場合に多くみられるが、逆に、一般化に伴つて語義が限定されることもある。たとえば、広く「三世因果の応報」を意味していた『果報』が、「現世の幸福」という良い意味にだけ用いられるようになり、『反対』、『因果』は悪い意味に限定されるというような場合である。

また、縮小の一種と考えられるものに偏義がある。これは、『人物』という語が「人と物」から「人」の意味になった如く、二字漢語の二つの漢字のうち一方の文字に意味が限定されるものである。

『賞玩』が「ほめそやし楽しむ」という意味から「賞」の字に意味の重点が移り、「ほめたたえる」という意味になったり、『料簡』が「はかりえらぶ」(「料」は「はかる、考える」、「簡」は「えらぶ、調べる」)から「考える、考え」という意味になったりする例などがあげられる。

(B)として、原義と転義との間に同一次元における共通性は認められないが、相互に何等かの関係がある場合、その関係によつて一方の語形を他に転用するものがあげられる。

たとえば、『元来』(「女官の住む部屋」の意であった)、『女房』が「女官」の意味となるような場合である。同様な変化として、『御所』、『公家』、『地下』などがあるが、これらはいずれも場所を表わす語をそこに住む人に転用したものである。また、『家来』という語はもともと「一家の礼儀作法」という意味の『家礼』という語であったが、「礼をつくして仕える者」ということから「従者」の意味に転用されたと考えられる。

この他に、原義と転義の関係が対応する場合がある。即ち、対義への変化である。

『勝事』は本来「すぐれたこと」という意味であったが、「珍しい出来事」から転じて「不吉な事件」を意味するようになり、「笑止」と書かれるに至る。佐藤喜代治氏は「これは、不吉な事件をそのまま露骨に言うのを避けた、一種の忌みことばであったと見られる。」と述べておられる。

『尋常』は中国では「普通、平凡」という意味であったが、日本では中世、「立派な、すぐれている」という意味で用いられることがあった。これは、『尋常ならざる』で「普通でなく」の意味で使

われたのが、尋常なる、と混同を起こしたものと思われる。また、無念、という語が「何も考えないこと」から「思いが残る、残念な」という意味に変わったことも類似の例と言えよう。

最後に、形態との関りで語義変化が起こったと考えられるものをあげておく。

『さるげんじ』に「きよう、こつがら、じんじやうなる、人かな」とある。器用、は、『大草版平家物語難語句解』の説明に「gentil-<sup>(注7)</sup>」(優雅)とあるように、容貌の美しさを表わす意味で用いられている。これは、器用、と、器量、の形態上の類似のために、技能がすぐれている」という語義から「風采・容貌が美しい」という語義に変化したと考えられる。また、上臈、という語が中世に「高貴な女性」という意味に用いられたり、籌策、という語が「計略・策謀」の意味から「仲裁・仲介」という意味に変化するのにも「上」と「女」、「籌」と「仲」が混同された結果であると思われる。この他、先に述べた「近内」「渴命」など、語義変化による当て字と考えられるものも、その語義変化の過程において、もとの漢字と当て字となる漢字の形態の類似あるいは一致から連想されたものと考えれば、この型の変化であると言えよう。

以上、漢語の語義変化の分類を試みたが、変化の過程や時期の詳細は述べることができなかつた。また、これまであげてきた語義変化のいずれに属すべきか問題のものや、二つ以上の型が複合した変化であると説明すべきものもあるかもしれない。結局のところ、個々の語についての詳細な研究が必要となってくるのである。

しかし、いずれにせよ、これらの語義変化は、漢語が次第に社会に広く深く浸透し、日常生活の中で用いられるようになったために

起こつたものであり、漢語の漢字ばなれによる和語への同化がその原動力であつたと考えられる。一般の民衆は文字を知らず、たとえ知つていても、それは主に仮名であり、漢語の意味を文字を通して知ることができなかつたためである。御伽草子の中の漢語にそのような和語的な語義変化を起こしたものが多いのは当然であるが、それが御伽草子の漢語の一つの特色と言えよう。

## 五、おわり

本稿では、御伽草子の漢語の性格をいくつかの面から探つてみたのであるが、仏教語の状態、現代語との比較など残された課題も多い。また、語誌については詳しくふれることができなかったし、あえてさけたところもある。全体の特色を見出そうとしたからである。もちろん、数百編の中からわずか三作品をとりあげただけで、御伽草子の漢語全体について論ずることはできない。さらに多くの作品の研究の積み重ねが必要であることは言うまでもないが、不十分な本稿がその発端ともなれば幸いである。

### (注)

1、「御伽草子」という名称は、周知のように、広義・狹義二通りに用いられているが、本稿では、この名称を広義に、即ち、室町時代から江戸時代初期にかけて成立した数百編の短編小説の総称として用いている。

また、御伽草子の語彙に占める漢語の割合は、柏合嘉弘氏の調査によると、『一寸法師』一三・五〇語、『浦島太郎』二・九〇語(六四語)(参考文献6)、松本宙氏の調査によると『木幡狐』一〇・五〇語(四九語)(参考文献5)となっている。

2、以下、『日葡辞書』は土井忠生氏他『邦訳日葡辞書』(昭和55年、岩波書店)による。

- 3、佐藤喜代治氏「和製漢語の歴史」(森岡健二氏他編『講座日本語学 4 語彙史』(昭和57年、明治書院) 参照。
- 4、新村出氏「馳走」といふ語の歴史のため」(新村出全集』第四卷、筑摩書房) 参照。
- 5、参考文献7参照。
- 6、参考文献3三一六ページ参照。
- 7、森田武氏『天草版平家物語難語句解の研究』(昭和51年、清文堂) 四〇八ページ参照。

〔参考文献〕

- 1、市古貞次氏著『中世小説の研究』(昭和30年、東京大学出版会)
- 2、佐藤喜代治氏編『国語学研究事典』(昭和52年、明治書院)
- 3、同 『日本の漢語、その源流と変遷』(昭和54年、角川書店)
- 4、亀井孝氏他編『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』(昭和39年、平凡社)
- 5、松本宙氏「御伽草子の語彙」(佐藤喜代治氏編『講座日本語の語彙 4 中世の語彙』昭和56年、明治書院)
- 6、柏谷嘉弘氏「漢語の変遷」(森岡健二氏他編『講座日本語学 4 語彙史』昭和57年、明治書院)
- 7、前田富祺先生「和語の意味変化」(同右)